

ジャコウアゲハは南小にやってくるのか？

～チョウの飛ぶ庭づくり～

安曇野市立豊科南小学校 6 年 本活動報告児童

1、テーマを選んだ理由と目的

総合的な学習の時間でジャコウアゲハが地域の貴重なチョウだと知った。「安曇野市版レッドデータブック2024」では準絶滅危惧に指定されている。どんなチョウなのか、生息数が減少しているのはなぜなのか。保護をするために、学校にアゲハが繁殖できるビオトープを作れないか、調べてみようと思った。

2、ジャコウアゲハの驚きの生態と幼虫のエサの秘密

・ジャコウアゲハは45～60mmほどの大きさのアゲハチョウの仲間。4月から10月に本州から沖縄まで広く見られる。名前の由来：オスの羽から麝香（ジャコウ、香水の香り）のような甘い香りがするため。

・体内の毒（アリストロキア酸）：幼虫時に毒草である「ウマノスズクサ」を食べて体に毒をためるので、一度このアゲハを食べた鳥は、学習をして食べようとしなくなる。

オスとメスの違い：オスは体が一回り小さい。黒い羽でお腹などに赤い模様がある。メスは大きく、黄色が混じったような灰色の羽を持つ。



図1 ジャコウアゲハ成虫の雌雄

・ウマノスズクサ土手や河川の堤防、道端などに生えるつる性の多年草。悪臭がして毒を持ったため昆虫には不人気だが、ジャコウアゲハの幼虫はこれを好んで食べる。

・名の由来：丸い果実がぶら下がるようにつき、その姿が馬の首につける鈴のように見えるため。（果実はめったに見られない）身近な場所に生えるため、開発や農薬など人間活動の影響を受けやすく、全国的に急速に少なくなっている植物である。

→ジャコウアゲハの幼虫はスズクサ類しか食べないため、スズクサの減少は幼虫の減少にも繋がると思われる。環境の変化によりジャコウアゲハが住める場所が減ってきているのでは？

3. ビオトープを作る

《ジャコウアゲハの繁殖地に必要なもの》

・幼虫のエサーウマノスズクサ

・成虫のエサーアサミ、ツツジなどの花畑・卵を産める、サナギが隠れる事ができる場所ーウマノスズクサのつるが巻き付ける丈夫な木や支柱、ネットなど総合学習の時間を使って、学校の中庭の日当たりの良い場所にツツジ7本、ウマノスズクサ6本を植えて、ビオトープ作りをした。（2026年5月）《中庭へ育てたジャコウアゲハを放す》地元の有志の方よりジャコウアゲハの幼虫と卵をいただいたので、今年の春から夏にかけて育てた成虫のオス4羽、メス8羽を中庭に放すことができた。



図2 苗木を植える様子

4. 現在の様子と課題、感想

ビオトープ完成後、現時点では新しい卵や幼虫は確認できていない。成虫も定着した様子は見られなかった。

○ウマノスズクサの数や花の状態が十分ではなく、チョウが卵を産む場所として選はれなかったのかもしれない。

○放したチョウは、別の場所を見つけて飛んでいってしまったのかもしれない。

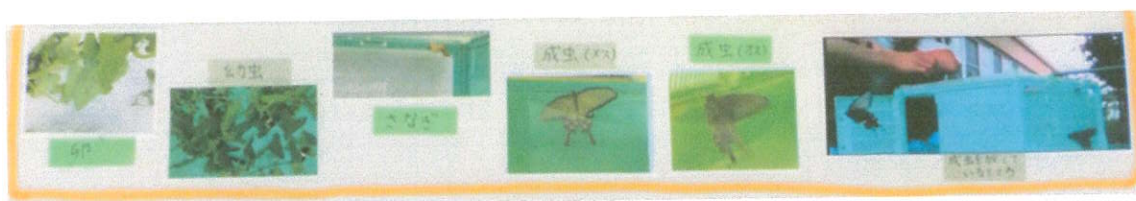


図3 クラスで飼育したジャコウアゲハの成長過程

○他の種類のチョウが飛ぶ姿は見かけた。ビオトープとしての役割は果たしているのでは。今後のためにも、ウマノスズクサが大きくなるように育てたり、草取りをしたり、花の種類や数を増やしたりと工夫をしていきたい。いつかこの庭にジャコウアゲハが飛び、学校になくてはならない存在になれば良いと思った。



図4 ビオトープづくりの様子

○参 考 文 献

村松 優の昆虫写真図鑑 ムシミル

安曇野市版レッドデータブック2024

○ご協力頂いた方

安曇野市オオルリシジミ保護対策会議 代表者様

ウマノスズクサ提供 安曇野市豊科郷土博物館様



全校集会でジャコウアゲハについて報告した場面



地域の専門家からジャコウアゲハについて学んだ場面



校内に設置されているウマノスズクサについての看板

「ジャコウアゲハ」は南小にやってくるのかーチョウの飛ぶビオトープづくりー

安曇野市立豊科南小学校 長野県

○活動期間：2025 年 4 月～

※実践主体の本活動報告児童は 2023 年の 4 学年時から継続実施

○参加人数・部活名等

第 6 学年 1 学級 29 名＜うちプロジェクトリーダー 3 名＞

教員 2 名（理科教諭・学級担任兼環境教育係）

○活動場所

学校ビオトープ、教室

活動内容

「ジャコウアゲハ」は、『安曇野市版レッドデータブック 2024』で準絶滅危惧種に指定されている。本活動報告児童は、総合的な学習の時間で「ジャコウアゲハ」が地域の貴重なチョウだと知ったことから、保護するために学校でチョウが繁殖するビオトープを作ろうと考えた。これまで「ジャコウアゲハ」をクラスみんなで 3 回にわたって飼育してきた。また、「ジャコウアゲハ」はどんなチョウなのか、なぜ生息数が減少しているのかを図書館の本やインターネットで調べたり、地域の専門家に聞いたりしながら調査して、理科教諭やクラスの友達と協力しながら「ジャコウアゲハ」の

住める環境を作り続けてきた。本活動報告児童は、これまでの学習から分かったことを夏休みの自由研究でポスターにまとめた。学校ビオトープに「ジャコウアゲハ」の生育環境をつくることと、全校に「ジャコウアゲハ」のことを知らせ、活動を引き継げる方法を考えている。

活動のあゆみ

【5年生のとき】

本報告児童の所属クラスでは、5年生の4月から学校ビオトープやマイクロプラステックについて調べる活動をしていたことから学級総合のテーマが環境学習となっていた。2025年7月14日、クラスの総合的な学習の時間に「ビオトープの自然を守ろう」という全体のゴールが決まった。そのなかで、本報告児童は「ジャコウアゲハ」について調べたい思いが高まった。

2025年10月30日。クラスの中で、「ジャコウアゲハ」について調べたり、チョウのサンクチュアリづくりのプロジェクトチームが発足したりした。2025年12月16日、本校はユネスコスクールとして学校ビオトープを生かした環境学習の取り組みが認められ「信州 SDGs アワード 2025」を受賞した。2025年12月25日。終業式で全校に本報告児童を中心としたクラスのプロジェクトチームが「ジャコウアゲハ」につ

いて紹介した。本報告児童が、「ジャコウアゲハ」についての取り組みをまとめ、応募した「日本環境教育学会 2025 年度 まちのみんなに広がった私たちの環境アクション」で「日本環境教育学会賞」を受賞した。

2026 年 1 月 21 日。「ジャコウアゲハ」に詳しい地域の昆虫専門家から総合的な学習の時間に学んだ。2026 年 2 月 8 日、本校は長年の学校ビオトープでの環境教育の取り組みが評価され「全国学校園庭ビオトープコンクール 2025」で「優秀賞」を受賞。

【6 年生のとき】

2026 年 4 月 10 日。地域の昆虫専門家から新たに分けていただいた「ジャコウアゲハ」、クラスで飼育し始めたうちの 1 頭が成虫になり、羽化した。しかし、校内にあった「ジャコウアゲハ」の食草のウマノスズクサが刈り取られたり、枯れてしまっなかったりすることにクラスで危機感を募らせた。2026 年 4 月 15 日、飼育ケースで飼育していた「ジャコウアゲハ」が弱ってきたので外に放すが、間もなく死んでしまった。「ジャコウアゲハ」の死を無駄にしないために、これから羽化する「ジャコウアゲハ」に対してできることはないかと考えた。飼育のためにガラスのショーケースを設置したり、ポスターを作成したり、「ジャコウアゲハ」の好む食草などを植えるためのビオトープづくりが始まった。スコップで穴を掘ったり、石を取り除いたりした。地域の博物館から分けていただいたウマノスズクサを植えた。4 月 30 日。しかし、これ

までに植えてあったウマノスズクサが枯れたと思っていたが、自生してきたことを確認できた。2026 年 6 月上旬に地域の昆虫専門家に再び「ジャコウアゲハ」の幼虫を分けていただき、教室で飼育が始まった。6 月 9 日は、総合的な学習の時間にサツキやブッドレアなどいくつかの苗木をクラスみんなで植えた。6 月 15 日も継続して活動をした。2026 年 6 月 30 日。「ジャコウアゲハ」の 3 匹目が成虫になった。これまでの経験を活かし、羽が乾いた段階で外に子どもたちが「ジャコウアゲハ」を放した。また、これまで幼虫から飼育してきた「ジャコウアゲハ」は、すべて蛹になり、1 学期中にすべて成虫になった。その後、これまでの学習のまとめとして、「ジャコウアゲハ」に関する本を作り始めた。2 学期が始まり、一週間が経過した 2026 年 9 月 3 日には、以前本校で勤務していた理科教諭が家庭で飼育していた「ジャコウアゲハ」の幼虫を分けてくださり、今年に入って 3 回目の飼育が開始された。

今後の見通しとしては、別紙の記述にあるように苗木の植栽によってビオトープづくりが完成し、「ジャコウアゲハ」の成虫を放したものの、新しい卵や幼虫は確認できていない。本校では 10 年近く前から「ジャコウアゲハ」の取り組みを始めた教員がいたが、「ジャコウアゲハ」が定着しないわけは何なのか、ヒアリングし探っていく。本報告児童の仮説としては、ウマノスズクサの数や花の状態が十分ではなく、チョウが卵をうむ場所とし選ばれなかったということである。よって、成虫になり、放したチョウは別の場所を見つけて飛び立っていったのかもしれない。これらの仮説

に対して、本報告児童はウマノスズクサが大きくなるように育てること、草取りをすること、花の種類や数を増やしたりして工夫していきたいと考えている。そして、いつかこの学校ビオトープに「ジャコウアゲハ」が飛び交い、「ジャコウアゲハ」が学校になくてもならない存在になればよいという願いがある。

成果・工夫した

【親しむ活動】

- ・学級や渡り廊下で「ジャコウアゲハ」を飼育した。

【理解する活動】

- ・理科専科の教諭、地域の専門家、博物館から、「ジャコウアゲハ」について学んだ。
- ・学級の総合的な学習の時間と学級活動と連続させ取り組んだ。

→教員や地域の関係者の支援を受けながら、子どもたちが主体的に活動している。

→保護者や下記の関係者とかかわりを深めながら、協力を得て活動をしている。

【守る活動】

- ・学校ビオトープにチョウのサンクチュアリづくりとしてチョウの食草等を植えた。
- ・教室で飼育することで外敵から守り、成虫まで成長させた。

【広める活動】

- ・ 2025 年に授業参観で保護者にプロジェクトを発表した。
- ・ 全校集会を通して全校児童に「ジャコウアゲハ」を守ることの意義を啓発した。
- ・ 各クラスに「ジャコウアゲハ」についてのポスターを配布し掲示してもらった
- ・ 本報告児童が「日本環境教育学会 2025 年度 まちのみんなに広がった私たちの環境アクション」で全国に活動を発信した。

→子どもならではの着眼点で広める活動をして、発表に工夫を施している。

<地域との連携>

地域の昆虫専門家様・・・「ジャコウアゲハ」の幼虫の提供、飼育の指導

豊科郷土博物館 様・・・「ジャコウアゲハ」の食草の指導

本校元教諭・・・「ジャコウアゲハ」の幼虫の提供、飼育の指導

<継続している点>

- ・「ジャコウアゲハ」の飼育
- ・「ジャコウアゲハ」のサンクチュアリづくり(草取りなど)
- ・学級の総合的な学習の時間での学習

→「ジャコウアゲハ」の生育環境の保全につながっている。

<今後期待されること>

- ・ 地域社会への発信
- ・ 学校として「ジャコウアゲハ」の継続飼育
- ・ ユネスコスクールとして SDGs と関連させた ESD 学習としての展開
- ・ 「ジャコウアゲハ」の成長記録をベースとした探究学習

